

2.1.7 施設・設備

【評価項目 13-0-1】 施設・設備等の整備（情報インフラを含む）

- （必須要素）大学・学部等の教育研究目的を実現するための施設・設備等諸条件の整備状況の適切性
- （必須要素）教育の用に供する情報処理機器などの整備状況
- （選択要素）社会へ開放される施設・設備の整備状況
- （選択要素）記念施設・保存建物の保存・活用の状況
- （KG1）校地・校舎面積の状況
- （KG2）資産・備品の管理状況
- （KG3）教室の整備・運用状況
- （KG4）視聴覚機器の整備・運用状況
- （KG5）情報処理機器等の整備・運用状況
- （KG6）研究室の整備状況（個人研究室、共同研究室等）
- （KG7）研究所の整備・運用状況
- （KG8）課外活動施設の整備・運用状況
- （KG9）厚生施設の整備・運用状況
- （KG10）体育施設の整備・運用状況
- （KG11）学外施設の整備・運用状況（千刈、立山、戸隠等）
- （KG12）ネットワークシステムの整備状況

【評価項目 13-0-6】 キャンパス・アメニティ等

- （必須要素）キャンパス・アメニティの形成・支援のための体制の確立状況
- （必須要素）「学生のための生活の場」の整備状況
- （必須要素）大学周辺「環境」への配慮の状況

【評価項目 13-0-7】 利用上の配慮

- （必須要素）施設・設備面における障害者への配慮の状況
- （選択要素）各施設の利用時間に対する配慮の状況
- （選択要素）キャンパス間の移動を円滑にするための交通動線・交通手段の整備状況

【評価項目 13-0-8】 組織・管理体制】

- （必須要素）施設・設備等を維持・管理するための責任体制の確立状況
- （必須要素）施設・設備の衛生・安全を確保するためのシステムの整備状況

<2003年度に設定した目標>

1. 既存教室のAV化
2. PC教室の増設もしくはレンタルラボの増設
3. 障がい者に対応した環境整備

（現状の説明）

文学部本館は経年による老朽化が進み、教育環境としては決して充実しているとは言えない。1997年に文学部の準専用棟として竣工したF号館は、言語教育、情報処理、演習等を中心とした授業に使用している。文学部本館は1929年の竣工で、設置状況は講義教室4、演習教室4、共同研究室10、副室8、実験実習室2でこれらの総面積は1,428.16㎡である。またF号館は講義教室10、演習教室11、実験実習室35、情報処理学習施設1で総面積は2,259.6㎡である。

文学部本館教室は授業に使わずらわしいという声が多く、稼働率も平均に比べて低い（全学平均66.0%→文学部本館28.0%）。その一方で、F号館については76.0%という高い稼働率を示している。ただ、文学部1年生必修の人文演習Ⅰ・Ⅱは1クラス平均35人で授業を行っており、F号館演習教室はその多くが30名までの定員であるため、使用できない状況にある。

AV化については文学部の教育研究目的を実現するため積極的に取り組んでいる。F号館においては、当初からカセットデッキ、CDプレーヤー、ビデオデッキ、レーザーディスク、OHCを基本配備している。文学部本館、新館においてもビデオデッキ、カセットデッキについては多くの教室に備えられている。

情報処理関連の授業に供するためにF号館202号教室にはデスクトップパソコンを60台配備し、情報処理の授業のみならず、統計関係の授業にも使用している。授業に使用しない時間帯は、自習用として学生に開放している。また貸し出し用パソコンを60台用意している。本館2教室及びF号館1教室には無線LAN環境を整備し、インターネット接続が可能になった。これらの教室も授業に供しない時間帯は学生の利用スペースとして開放している。

地下1階掲示板室横に開放スペースを設け、ベンチ・机を置いて学生が自由に利用できるように配慮している。またごみの分別化を進めるために、回収に対応したゴミ箱を管轄建物に配置している。

障がい者への対応としては、本館には1階から2階までのエレベーターを設置し、主たる教室・研究室へのアクセスが可能となっている。F号館については全館エレベーターでの移動が可能となっている。また車椅子使用学生が授業を受けることができるよう専用机を配置している。視覚障がい者への対応としては拡大読書機を本館読書室に配置し、聴覚障がい者への対応として補聴器補完システムの可動式を1台確保するとともに、F号館の主たる教室には固定的な当該システムを導入している。

管理体制については、各専修単位で共同研究室を管理している。それぞれの専修で管理責任者をおき、安全管理・衛生管理を行っている。

(点検・評価の結果)

AV化については、F号館を中心に推進してきた。竣工当初は最新鋭の設備を備えていたが、経年に伴い、故障が多数発生し、新しい機器の設置が求められている。特にDVD機器の設置希望が高い。その要望に応えるため、予算化を要望し、2005年度にはその一部が認められ、3教室にDVDプレーヤーを配備した。しかし、さらなる要望に応えるため、学部予算にて新たに3教室に設置を予定している。2005年秋学期には供用開始できることになっている。本館1号教室はチャペル用としての機能を果たさなければならないため、授業に供するには不便が多いが、授業として使用しやすいようにするには抜本的な検討が必要となり、短期・中期的な展望の中では視野に入れにくい。

情報処理機器の充実のため、2004年度にはF号館202号教室に5台のデスクトップパソコンを増備した。これにより授業定員を増やすことができた。また教員用にも1台増備したことで、授業を円滑に進めるのに役立っている。

無線LAN設備を配した教室においてはこれを利用した授業が展開されることを期待されるが、まだ十分に活用されているとは言い難い。さらに授業のない時間帯にはパソコン利用のためのスペースとして開放しているが、これも利用頻度が低い。利用できるのが授業の空き時間のみであるので、利用しづらいという現状がある。貸し出し用パソコンの利用頻度は長期貸与を中心として高まっている。

掲示板横の開放スペースにはいつも学生がおり、コミュニケーションの場としてよく使

われている。ごみの分別についてもゴミ箱を数箇所に設置しているので、実現している。

障がい者への対応は個々に状況が異なっているため、個別に対応している。2005年度は車椅子使用の学生が2名入学した。2名の状況にあわせて授業を適正に受けることができるよう、F号館1階の救護室を改造して、専用ベッドを設置し、授業の事前準備及び事後の休息等ができるよう配慮している。掲示板については設置場所が地階で、車椅子では行けない場所にある。そのため、事務室においてその代用ができるよう、情報を事務室で集約・ファイル化し、事務室内ローカウンターでそれを閲覧できるようにした。また1人でも事務室への出入りを可能とするために、出入り口扉を引き戸に改修した。障がい学生にとっては支障なく学業に精励できている体制が整っていると見えよう。

専修単位での共同研究室の管理は、責任性を明確にしているため、全ての専修において適正に管理されている。

(改善の具体的方策)

今後は、教室の容量に見合ったクラス編成を進める。また、DVDプレーヤーを中心としたAV化を進めていく必要性が高いので、継続的に予算化を進める。経年による機器の故障等については全学もしくは学部単位での保守体制を確立し、機器故障等による授業への支障を未然に防ぐ。

パソコン教室として授業の空き時間に開放している教室については掲示等で周知を徹底し、利用促進を図る。

障がい者への対応については個々で対応が変わってくるので、その都度、適切に対応することとする。